神の随まに

神の随まに

ab

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=23144764

Detroit:BecomeHuman, RK1600, RK800-60, RK1600フェス2024

RK1600フェス「ワンドロ・ワンライふぇすてぃばる」参加させていただきました！ワンライだってのに若干1時間超えてしまいました(´・ω・`)ｽﾐﾏｾﾝ

ほぼ60くんの独白で5nくんの出番がかなり少なめです。

Table of Contents

神の随まに

ただ為すこともなくベンチで座っている様は、ぼんやりという言葉がよく似合う。

夏の暑さもすっかりと鳴りを潜めた街中の公園には、人種も年齢も性別も多種多様な人々が集っていた。気温も下がり活動しやすくなったというのも要因だろう、広場を走り回る少年少女や、園内のランニングコースを駆ける青年、木陰で静かに読書をする老人など、公園で過ごす人間は実にバラエティに富んでいる。

いや、人間だけではない。こめかみに光るはずのLEDを外し、身分を現すユニフォームからカジュアルな服装へと出で立ちを変えたアンドロイドもまたこの場に多くいることに、RK800-60は気付いていた。

人に混じってごく自然にふるまっている彼らを見ると、本当に1年前までアンドロイドが差別されていた事実など幻のように思えてくる。変異して自我を持ったとされるアンドロイドが人間に反旗を翻せば戦争になると60に教えたのは誰であったか。結局、デモを成功させた彼らが築いた世界では、今のところ戦争など起きてはいないし、ご覧の通りの平和な光景が広がっている。変異体など駆逐するべくプログラムされて、サイバーライフ社に従っていた自分が酷く滑稽だった。

ひらり、と頭上から赤い広葉樹の葉が落ちる。

一体僕は何をしているんだろうな、と60は思った。変異した同型機を止める任務に失敗し、シャットダウンしたかと思えば再起動させられ、次に命じられた任務はデトロイト市警で勤務しろというものだった。破壊対象だった同型機と組まされ、共に業務に当たることになるなど予測不能もいいところだ。そのうえ最近は、後継機だとかいうRK900も同じ署内に配属され、60自身も一体何が何なのだか分からなくなってきている。

しかも、それが存外悪くはないと思っていることも。

目の前を一組の男女が歩いて行った。成人男性が手を取っている女性はST200で、こめかみにはやはりLEDの輪がついていない。プログラムにはないような満面の笑みで交わしている談笑と、足元に積もる色とりどりの落ち葉は踏む軽い音を音声プロセッサーが拾う。いつかソフトウェア内部で見た禅庭園の秋の景色にもあったはずなのに、その暖色にグラデーションを成す色彩も、さくさくと質感をもって空気を震わす音質も、60には鮮烈なものを伴って知覚されていた。

あのままシャットダウンしていれば知ることがなかった世界が、目の前に広がっている。

やはり悪くはないな、と60は思っていた。

こういう時は紙にでも感謝すべきなのだろうか。アンドロイドである60には信仰すべきものがない。あえていうならば、アンドロイドの救世主と言われるrA9がそれにあたるのだろうか。確かに、アンドロイドのデモが成功し、新たな種族と認められることが出来な

かったならば、目の前の光景はありえなかったと考えるに、60が感謝を述べるにはふさわしい存在だと思えなくもないが、知覚的ないものをイメージして信じ敬うということは、まだ60には難しかった。

ひらりひらり、と再び赤い欠片が舞う。

『君、今どこにいるんだ』

ふいにソフトウェア内部に響いた声にはっとする。どうやら思いの外、思索にふけっていたらしい。

自分と同じ音声設定のその声は、少しだけ訝しげな色を含んでいた。

「近くの公園にいる」

『珍しいな、約束の時間を過ぎるなんて。どうしたんだ？ 何かあったのか】

「いや。手土産がないからどうしたものかと悩んでいた」

勿論嘘だ。

ホームパーティに呼ばれたのが初めてで戸惑っているなど、声帯ユニットが壊れても言えない、

『そんなの気にしなくていいのに。手ぶらでいいんだから、早くおいでよ』

「そうするよ。警部補たちを待たせるのも悪いしな」

それじゃあまた後で、と言葉を交わして通信を切った。

ベンチから立ち上がり、伸びをする。機体には全く意味のない動作だったが、そうすれば少しは気が晴れるような気がした。手を伸ばした先に、かさりと細い枝が指先に触れる。葉先が5つに分かれた赤い葉が、武骨な硬い枝先にちらちらと茂っている。自分たちの上司のデスクに同じ植物か飾られていたのを思い出し、60はそっとその枝を手折った。手土産にはならないが、「綺麗だと思ったから折ってきてしまった」といえば、彼はどんな顔をするだろうか。違法行為だとなじるだろうか、君らしくないねと笑うだろうか。

世界を変えた英雄に、なによりいつも共に働く同型機に密かな感謝を手に取って、60は錦の落ち葉の絨毯を足取りも軽く歩いて行った。